
アラブ人は言った「お宝は勝者のためにある」

パンター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラブ人は言った「お宝は勝者のためにある」

【Nコード】

N4683U

【作者名】

パンター

【あらすじ】

暑い昼下がりだった。僕はアラブ人の行商人にあった。
熱い駆け引きが今始まる。

(前書き)

暑いですね。

外気温が35度を超えた昼下がり。

僕は自動販売機を探していた。

喉がひりつく。渴いているをとくに通り越していたのだ。

町で一番標高が高い（標高57メートル）山の頂上近くに家を構える、はた迷惑な友人宅を訪ねて長い坂を登っている最中だった。流れる汗もはや止まり、ただ灼熱の太陽に肌が焼かれるがままにされていた。

暑い。だるい。喉渴いた。

確か前回来たときに自動販売機があつたはずだ。

曖昧な記憶を確かに一時の休息をとろうと自販機を探していた。そんな時だった。

背後から何か動物が駆けてくる足音が聞こえてきた。

振り返ると、駱駝に乗ったターバンを巻いたキャラバンの商人のような風体のアラブ人がやって来たのだ。

アラブ人は僕の側で駱駝を止め、赤銅色の顔を崩して笑顔を見せた。

「ワタシ商人ネ。欲シイ物何デモ売ッテアゲルヨ」

「ていうか、どこから来た？あんだ」

アラブの商人って。しかも駱駝に乗った商人って。日常日本のどこで商売しているんだよ。

ここにいるけどさ。

「アナタ、トテモ喉ガ渴イテイルネ。水アルヨ」

「まあ、確かに喉が渴いているけど。自販機で買っからいいよ」

「ソノ自販機ハドコニアリマスカ？サツキカラ探シテイルノデハアリマセンカ？」

「ちょ、それをどうして知っている」

「商人ノ勘デスヨ。ソレヨリ水ドウヨ。コップ一杯500円」

「何その値段。高すぎる。しかもなんだその怪しい能力は、どこで僕を見ていたんじゃないのか？」

「サ、サア。ソンアコトハアリマセンヨ。コノ坂ヲ登ッテクル人間ヲ待チ構エテイルダナンテ」

「畏かよ。喉を渴かせて坂を登ってくる人間を待ち構えている土産物商法かよ。観光地の山の頂上で飲む缶コーヒ―は美味しいさ。だが一缶200円はいかなものか、というやつなのか」

「私日本人ジャナイカラ分カリマセン」

アラブ人は両手の平を上げてやれやれという格好をした。むかつく。

「ソレヨリモ、自販機ガナカタラドウスル気デスカ？水モナシニ進ムツモリデスカ？」

死ヌネ。間違イナク。

砂漠デ水モナシニ渡口トスル者ヲ何テイウカ知ツテイマスカ？

無謀者デス」

「一体いつここがサハラになったんだよ。死なないし。無謀者じゃねえし」

だが、こいつと言い争っているうちに余計に喉が渴いてきたよ。

「分かった。買ってやるよ、水」

財布から500円玉を取り出した。

「アリガトゴザイマス」

駱駝の横腹に積んでいた革の水袋から金属製のコップに水を注ぎ込んだ。

それを僕に突き出した。

それを飲んだ。

ぬるい。まずい。水に味などなかったが、このぬるさで水は不味かった。

高い買い物だった。

「イイ買い物ダッタヨ。マイドアリガトウゴザイマス」

アラブ人は駱駝を走らせ坂を登っていった。新たな餌食でも探し

に行つたのだろうか。

まずい水だったが、渴きはほんの少し癒えたので再び歩き出した。十分ほど歩いた頃。

螺旋状に登つてゆく坂の先に今更ながら求めていた物が見えた。

自販機だ。

ちくしょう、後十分我慢すれば冷たいミネラルウォーターが飲めたのに。

と、あれはさっきのアラブ人じゃねえか。

駱駝から降りて自販機で買ったらしい「東アルプスのおいしい水」を飲んでいた。

容器に無数の水滴が付き滴り落ちている。

ごくろ。喉が鳴るといふのはこう言うことだったのか。

僕は走つて自販機の前までやってきた。

「アア。サツキノお客様」

アラブ人は美味しそうに半分ほど残していた冷えた水を飲み込んだ。

「ヤハリ冷タイ水ハ美味シイデス」

「美味そうじゃねえか。もう一杯飲むぞ」と財布を開いて驚いた。硬貨がない。さっきの500円玉で終わりだったのだ。

あとは紙幣だが。1000円札なら使えるのに、今日に限って10000円札しか入っていなかった。

まさか。ありえない。冗談だろ。

「ドウカシマシタカ？ 飲マナインデスカ？」

「さっきお前のぬるい水に最後の硬貨を使ったんで、もうないんだよ」

「ソウデスカ。ソレハ残念デシタ。私ノ国ノ諺ニコウアリマス。オ金ハ計画的ニ」

おい。どこかの消費者金融会社のコピーで聞いたことがあるぞ。本当に諺か？

ミネラルウォーターを飲み終えたアラブ人は駱駝に乗り、坂を下

る様だった。

「デハサヨウナラ。商売で得た金で水ハ美味シカッタデス」

駱駝はすさまじい勢いで坂を下っていった。

何だか悔しさが残された。ちくしょう。

もう胡散臭い行商人には騙されないぞ。

（後書き）

タイトル意味ねえ！。

最後の百円玉が自販機に拒絶されてつり銭口に戻ってきた時の腹立たしさといったら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4683u/>

アラブ人は言った「お宝は勝者のためにある」

2011年10月8日21時46分発行